






戦時期小豆島の丸金醤油株式会社の 朝鮮進出について

天 野 雅 敏

はじめに

香川県小豆郡苗羽村に1907（明治40）年に設立された丸金醤油株式会社は、企業規模の拡大をはかり近代的工場を建設し、良質な最上醤油の生産につとめ、品質本位、消費者本位を謳い、マークの市場への浸透をはかったが、それは容易なことではなかった。そうした事態に対して、並醤油の製造と販売を余儀なくされるも、高等醤油の生産・販売を目指すという事業方針を放棄することはなかった。こうして、並醤油の出荷量は次第に停滞的となり、高等醤油の出荷量が回復し、主要市場の大阪、神戸への出荷量が増加するとともに、海外輸出の道を探っていた。丸金醤油は、大阪に本店をおき、ハワイに支店をおいていた濱野久吉商店と提携して高等醤油のハワイ向け輸出を試みるとともに、アメリカ向け輸出も目指していた。同社の醤油の海外輸出は、ハワイ向け輸出からアメリカ向け輸出へと展開し、高等醤油の真価の認知も進んでいた。⁽¹⁾

その後、同社は、1930（昭和5）年に東京市場に進出しており、1940（昭和15）年9月には「満洲」に進出し、満洲醤油株式会社を遼陽市に設立して

(1) Roberto Rocha Sampaio・天野雅敏「近代小豆島醤油醸造業の発展と醤油市場—丸金醤油株式会社の事例を中心に—」、『国民経済雑誌』第207巻第1号、2013年、59—79頁。

いた。また1942（昭和17）年4月には朝鮮に進出し、朝鮮丸金醤油株式会社を馬山に設立している⁽²⁾。こうした丸金醤油のその後の市場の動向に関しては、十分な研究が行われているとは言いがたい。本稿でも、そうした問題を全面的に解明することはできないが、さしあたり丸金醤油の朝鮮進出をとりあげて、若干の検討を試みることにしたい。

1. 丸金醤油株式会社小史

19世紀に入り成長軌道に乗った後発醤油産地の小豆島では、醸造家の零細性は否定し得なかったものの、明治期を通じて著しい発展がみられた。小豆島では、醤油醸造業の改善への取り組みがなされ、資本蓄積の低位性を克服するために株式会社制度の導入がなされ、醸造規模の拡大がはかられた。第一次企業勃興期に会社形態をとった醤油醸造企業が設立され、日清戦後の第二次企業勃興期にはそうした現象が広く認められた。そして明治30年代に入ると、資本金規模は拡大傾向をとり、1907（明治40）年1月香川県小豆郡苗羽村に丸金醤油株式会社（資本金300,000円）が設立された⁽³⁾。

丸金醤油株式会社は、本格的な会社形態をとった醤油醸造大企業として創設され、醤油醸造試験場の研究成果にもとづいて技術革新をおこなおうとした小豆島の近代的な模範工場であった。同社では、関東の諸産地に対抗しようとするような番醤油を使用しない良質な最上醤油の生産が目指されており、品質本位、消費者本位を謳い、宣伝広告を通じて㊦マークの市場への浸透をはかっていた⁽⁴⁾。

(2) 日本醤油協会編集『日本醤油業界史』、日本醤油協会、1959年、610-611頁。

(3) 天野雅敏「後発醤油産地の発展過程—明治期の小豆島の事例を中心に—」、林玲子・天野雅敏編『東と西の醤油史』、吉川弘文館、1999年、256-261頁。
Roberto Rocha Sampaio・天野雅敏「近代小豆島醤油醸造業の発展と丸金醤油株式会社」、『国民経済雑誌』第206巻第4号、2012年、2-6頁。

(4) 前掲 Roberto Rocha Sampaio・天野雅敏「近代小豆島醤油醸造業の発展と丸金

戦時期小豆島の丸金醤油株式会社の朝鮮進出について

醤油の販路については、1934（昭和9）年12月の帝国興信所の調査「丸金醤油株式会社の現状」によると、⁽⁵⁾「従来最上醤油ヲ製造シ、主トシテ大阪方面ヲ根拠トシ同市ニ出張所及ビ販売部ヲ置キ、神戸、京都、呉、広島、松山方面ニ進出、確實ナル醤油問屋ニ特約販売セシム、姫路市紙屋町ニ配給所ヲ設置シ中国地方ニ販路ヲ開拓ス、輸出 神戸某商店ヲ経テ多少布哇方面ニ出シタリ」と記している。⁽⁶⁾

そして、また同調査によると、「大正十四年関東醤油進出ノ対策トシテ醸造庫六百十二坪ノ増築」をして、「昭和五年八月東京市丸ノ内三菱二十一号館内ニ出張所ヲ設ケテ、東京ニ進出」したものの、「関東醤油トノ競争熾烈ヲ極メ、業績不振裡ニ経過シ居タリシガ、昨昭和八年九月^上、^下ハ小樽一挺ニツキ五十銭値下発表シタルニヨリ大影響ヲ受ケ、之ガ対策上同様ニ五十銭ノ値下」をし、「販売上ノ競争近時益々其ノ激甚ノ度ヲ加ヘ且ツ島内同業者間ニ於テモ販売上ノ統制ヲ破リ互ニ競争スル状態ニテ前途甚ダ憂慮スベキ状態ヲ呈シタリ、茲ニ於テ第一次合併トシテ丸金、丸島、清水ノ三社ヲ昭和九年七月三十一日ニ合併スルコトニ決議」し、「次デ内海醤油株式会社ヲ同九年八月十二日合併」し、これらの合併により、「資本金合計五、七〇五、七〇〇円、内払込金二、九九八、九二五円」となり、「合併後工場名ハ総テ丸金工場ト称ス」ことになったという。

1917（大正6）年12月の千葉県野田の茂木、高梨一族8家の合同による野田醤油株式会社（資本金7,000,000円）の創立と1926（大正15）年3月の総

醤油株式会社」、6-8頁。

(5) ヤマサ醤油株式会社所蔵史料の史料番号3-2-4 20-24及び特19-20の史料による。

(6) 丸金醤油株式会社の1909（明治42）年から1917（大正6）年の醤油の国内販売動向や海外輸出の動向に関しては、前掲 Roberto Rocha Sampaio・天野雅敏「近代小豆島醤油醸造業の発展と醤油市場—丸金醤油株式会社の事例を中心に—」、61-79頁を参照。

建坪数14,653坪、鉄筋コンクリート造り3階建ての建物に最新の機械設備を据え付けた野田第17工場の竣工、それに1931（昭和6）年10月の全工程の一層の機械化をはかり製造工程の能率を高めた鉄筋コンクリート造り3階建ての同社関西工場（兵庫県加古郡荒井村（現、兵庫県高砂市）、工場敷地59,666坪）の竣工が⁽⁷⁾、丸金醤油のその後の動向に少なからぬ影響を与えていたことがうかがえるであろう。

醤油業界のこうした設備投資が進むにつれて、国内市場の飽和感が醸成され、1931（昭和6）年9月の「満洲事変」と翌年3月の「満洲国」の成立によって、醤油醸造企業の満洲等への進出が進んだ。野田醤油株式会社は朝鮮の仁川に本社を、京城、奉天に分工場を有していた日本醤油株式会社を1925（大正14）年4月に合併して大陸に進出し、満洲事変後、野田醤油株式会社奉天出張所の業務一切を継承して野田醤油股份有限公司（資本金1,000,000円）を1936（昭和11）年8月に設立し、1938（昭和13）年3月にこれを満洲野田醤油株式会社と改称している。同社は奉天市鉄西区嘉工街にあった。⁽⁸⁾

野田醤油の進出の後塵を拝した銚子のヤマサ醤油は、1940（昭和15）年10月に満洲新京特別市に満洲ヤマサ醤油株式会社（資本金100,000円）を設立している。翌々年に資本金を1,000,000円に増資して、銚子工場で使われていた醤油、味噌の醸造に必要な機械器具等を移駐し工場建設を行い、1944（昭和19）年7月に醤油の出荷を開始したものの、戦時統制下で十分な成果

(7) 『野田醤油株式会社二十年史』、編纂兼発行者 市山盛雄、発行所 野田醤油株式会社、1940年、142-149頁、350-354頁、市山盛雄『野田の醤油史』崙書房出版、1980年、97-109頁、花井俊介『野田の醤油醸造業』、林玲子・天野雅敏編『日本の味 醤油の歴史』、吉川弘文館、2005年、124-133頁。

(8) 前掲『野田醤油株式会社二十年史』、264-265頁、674-676頁、野田醤油株式会社社史編纂室『野田醤油株式会社三十五年史』、野田醤油株式会社、1955年、184-185頁、田中則雄「キッコーマンの満洲進出と満洲における醤油事情について」、『野田市史研究』第7号、1996年、105-110頁、のちに同論稿は、田中則雄『醤油から世界を見る—野田を中心とした東葛飾地方の対外関係史と醤油—』崙書房出版、1999年、326-377頁に所収されている。

戦時期小豆島の丸金醤油株式会社の朝鮮進出について

をあげることができず、損失を残したまま敗戦を迎え、満洲から撤退した。⁽⁹⁾

ヤマサ醤油が満洲に進出した1940（昭和15）年には、小豆島の丸金醤油株式会社も満洲に進出した。同社は満洲生活必需品株式会社と提携して満洲遼陽市に36,000坪ほどの工場用地を確保し、満洲醤油株式会社（資本金2,000,000円）を同年9月に設立した。満洲醤油株式会社は、麹室内に使用する器具の一部を小豆島の本社に依存したが、他の設備は新しく調達することとし、年産150,000石の醤油生産を目指していた。こうして同年10月12日に着工したが、工事は遅々として進まず、工場の敷地（300m×400m）を囲む赤煉瓦の塀と建築物の基礎に取り掛かるのに2年ほどを要した。その後、300人余りの苦力を使って突貫工事を行い、事務所、守衛室、原料倉庫、原料処理場、麹室、仕込庫4棟、压榨場、製成場、澄場、包装場、出荷用倉庫（製品倉庫）を8ヶ月ほどで建設したものの、冬季の厳寒下にあって製麹、諸味の醗酵熟成に不可欠な温醸設備や仕込み作業に欠陥や不備がかさなり、諸味は醤油製成不能の状態となり、戦局の激化にともない状況は一層悪化し、⁽¹⁰⁾敗戦を迎えていた。

丸金醤油は、このような事態の推移に直面して、南鮮の馬山に朝鮮丸金醤油株式会社（資本金1,000,000円）を1942（昭和17）年4月に設立した。そして、小豆島の苗羽村を中心に醤油醸造業者15工場を買収統合し、それらの工場の建物、機械器具類等のなかから必要なものを移駐して、年産100,000石の醤油生産を目指して工場建設を推し進めた。⁽¹¹⁾そこで、この朝鮮丸金醤油株式会社のその後の動向について、つぎに節を改めて若干の検討をすることにしよう。

(9) 落合功「戦時期、食品企業の満洲進出について—満洲ヤマサ醤油株式会社を例にして—」、『修道商学』第45巻第2号、2005年、38—83頁。

(10) 木下元義『清水十二郎先生の追憶』、1991年、38—55頁。

(11) 前掲木下元義『清水十二郎先生の追憶』、38—40頁。

2. 朝鮮丸金醤油株式会社について

朝鮮丸金醤油株式会社の取締役社長には、小豆島の丸金醤油株式会社専務取締役の滝川辰太郎が兼務のまま就任し、1942（昭和17）年5月1日に工場建設に向けて地鎮祭と起工式を執り行った。小豆島の本社からの資材を満載した第1船がその日馬山港に入港しており、5月18日には第2船が、そして、また8月29日には第9船が入港して、朝鮮丸金の建設が行われるなか、滝川辰太郎が9月13日に他界し、本社2代目代表取締役社長となっていた佐伯與之吉が兼務のまま取締役社長に就任した。⁽¹²⁾朝鮮丸金の1945（昭和20）年3月末日の役員構成は、取締役社長に佐伯與之吉、常務取締役に清水十二郎、谷澤一信、取締役に彌谷醇平、林敏明、山本豊、監査役に木下空太、吉川太市郎が就任していた。⁽¹³⁾

そして、1943（昭和18）年4月21日京城で第1回株主総会が開催されており、朝鮮丸金の山本豊の日記には、5月11日に「朝鮮丸金は仕込済二二〇本、原料大豆朝鮮四五呎、豆玉六二六枚なり」との記載があり、仕込み作業が進んでいたことがうかがえる。その年度の原料割当てが9月11日になされており、「㊦一万一千石、㊧、嶋屋各一万石」となっていた。10月22日には、第1期工事計画も終了に近づき、第2期計画の打合せがなされており、12月15日には、慶南食品（株）に㊦印20挺、朝鮮油脂（株）清津工場に㊦印10挺、千両印10挺、同長箭工場に㊦印5挺、千両印5挺を初出荷し、翌日には釜山へ大樽130挺、京城へ23トン貨車の積み込みを行っていた。また1944（昭和19）年10月22日には、朝鮮丸金の生産・出荷予定を11月1,000石、12月1,000石、翌年1月500石としていたが、戦局を考慮して第2期工事計画の味噌工

(12) 前掲木下元義『清水十二郎先生の追憶』、39-42頁。

(13) 谷澤一信「朝鮮丸金終戦引揚処理記録」、1946年、盛田株式会社小豆島工場所蔵、を参照。

戦時期小豆島の丸金醤油株式会社の朝鮮進出について

場の建設を中止している。⁽¹⁴⁾

朝鮮丸金株式会社の取締役となり、また常務取締役を勤めた谷澤一信が「朝鮮丸金終戦引揚処理記録」を1946（昭和21）年1月に執筆しているので、ここではこの「記録」にもとづいて、その後の経緯を述べることにしよう。⁽¹⁵⁾

「記録」によると、谷澤は1945（昭和20）年3月に帰国し、小豆島の本社の丸金醤油と打合せをしている。そこでは、「戦局は次第に不利となりつゝ、ありしも情勢上如何共致し難し、只戦は勝つものなりとして経営続行に決定して帰鮮」したとする。その後、谷澤は同年6月京城で朝鮮丸金の主要株主でもあった吉川太市郎と面談し、「朝鮮丸金の売却引揚、又はこれに代るべき何等かの方法に付、種々打合せ」をしたが、「戦争は最後の段階に入り益々苛烈となり、朝鮮丸金としては軍納及軍関係品の納入極めて多かりしかは、到底右の如き処置は軍官方面より非国民的悪評を受け実行不可能ならんに付、三月打合せの通り勝つものとして進む外今更致し方なしと相談一決し帰社」している。朝鮮丸金では、同年6月3日の海軍監督工場令書示達式に向けて準備がなされていた。⁽¹⁶⁾

こうして、朝鮮丸金は、「内地人職員及朝鮮人工員を激励しつゝ、一路運営の万全を期したる為、軍官民よりの信望は益々高まり、朝鮮同業者よりも畏敬的となり、原材料又極めて豊富、此の上の配給割当は消費不能の旨屢々軍官方面へ伝達せしも、朝鮮丸金か此の超非常時に数段の増産を為さずして戦争に勝ちぬけるやと逆襲さるゝ有様にて、当時手持諸味四百八十本、味噌約四十万貫、代金支払済大豆約二千七百石、小麦二千二百石、別に割当未引取主原料大量に有り、味噌は百万貫製造を目標として、味噌本蔵の建物、設

(14) 前掲木下元義『清水十二郎先生の追憶』、45-48頁、51頁。

(15) 以下の叙述において、谷澤一信「朝鮮丸金終戦引揚処理記録」、1946年、盛田株式会社小豆島工場所蔵、からの引用の際には、その史料に頁数が付されていないこともあり、煩雑をさげ、その旨の注記を省略する。

(16) 前掲木下元義『清水十二郎先生の追憶』、54-55頁。

表 1. 朝鮮丸金醤油株式会社第 3 期貸借対照表
(1945 (昭和20) 年 3 月31日現在)

貸 方		借 方	
	円 %		円 %
土地建物	999,573 (38.9)	資本金	1,500,000 (58.4)
建設勘定	154,571 (6.0)	借入金	950,000 (37.0)
機械器具	282,450 (11.0)	未払金	119,012 (4.6)
貯蔵品	661,979 (25.8)		
売掛金	15,712 (0.6)		
銀行預金	58,920 (2.3)		
有価証券	18,009 (0.7)		
仮払金	127,442 (5.0)		
前期繰越損金	205,398 (8.0)		
当期損金	44,958 (1.7)		
計	2,569,012 (100.0)	計	2,569,012 (100.0)

(出典) 谷澤一信「朝鮮丸金終戦引揚処理記録」(昭和21年1月, 盛田株式会社小豆島工場所蔵)によって作成。

(注) 資産, 資本・負債の各科目の実数の数値は, 円以下を四捨五入したものである。

備等建設中なり」と「記録」には記されている。そして、「経理面は、二十年度よりは利益に転じ、二十一年度は繰越損金を解消して幾分の利益を挙げ、二十二年度より配当可能の状勢なり」とある。

1945 (昭和20) 年 3 月末日の朝鮮丸金の第 3 期貸借対照表が「記録」に紹介されているので、それを表 1 に整理して示しておくことにしよう。朝鮮丸金のこの期の貸借対照表の借方は、資本金, 借入金, 未払金からなっており、資本金は1,500,000円に増資されており、朝鮮殖産銀行からのものと思われる借入金残高が950,000円, 未払金が119,012円計上されている。借方の58.4%を資本金が占めており、借入金残高が37.0%, 未払金が4.6%を占めていた。買掛金等の計上はみられなかった。

つぎに貸方に目を転ざると、資産構成で大きな比率を示していたのは固定資産に関する勘定科目であり、土地建物が999,573円, 機械器具が282,450円,

戦時期小豆島の丸金醤油株式会社の朝鮮進出について

建設勘定が154,571円となっており、これらで総資産の62.0%を占めていた。そして、製品・半製品、原材料などからなるとされる貯蔵品が661,979円で、総資産の28.5%を占めている。土地建物、機械器具、建設勘定からなる固定資産に関する勘定科目と貯蔵品勘定で総資産の90.5%に達していた。他方、売掛金、銀行預金、有価証券、仮払金等の当座資産は、220,083円を数えており、総資産の9.5%ほどであった。買掛金の計上がなく、売掛金の計上も少ないのは、配給制度がしかれていたことによるものと思われる。

同表をみると、前期すなわち第2期の繰越損金が205,398円となっており、資本金1,000,000円とすると資本金利益率は-20.5%となり、それを1,500,000円とすると資本金利益率は-13.7%であった。その償却も第3期にかけて進んでおり、1945（昭和20）年3月末日の当期損金は44,958円となっており、資本金利益率は-3.0%となっていた。利益率の改善が第2期から第3期にかけてみられたとはいえ、朝鮮丸金は、損金を計上したまま敗戦を迎えていた。

3. 敗戦後の朝鮮丸金醤油株式会社とその撤退について

朝鮮丸金の谷澤一信は釜山道庁と味噌醤油工業組合等に所用があり、1945（昭和20）年8月15日釜山に赴き、日本の敗戦を知った。谷澤の「朝鮮丸金終戦引揚処理記録」には、「涙なく感情なく全く空白化されし思ひなり、直ちに馬山に引返さんとせしも列車なく鳴門旅館に一泊す、翌朝も列車なく、道庁へ赴きしも殆んど役人の影なし、正午発の列車を利用して漸く馬山に帰着せしは午後六時頃にして平常の二倍以上の長時間を要せり」とある。馬山に戻った谷澤は、「清水常務及山本取締役、小豆工場長と打合せ、形勢コントとして把握し難きも全員一致協力情勢に即応して万般善処せんも、最悪の場合は無一物引揚も亦やむなしと相談一決」したという。

そして、彼の「朝鮮丸金終戦引揚処理記録」によると、「戦況の良否によ

りて従順不従順のデリキットなる心理に左右され居りし朝鮮従業員又漸く悪化し、内地人を敵視するに至り、傲慢無礼の行動を示し始め、甚敷きは彼等の希望を充足せざれば殺すぞと迄極言する者も生ずるに至り、軍官方面よりの静粛増産継続指示も行はれず、十八日より二、三日間醤油の放出自由販売を為せしも中止して、臨時休業に移」ったとする。また、「馬山は奥地よりの内地引揚希望者集り来り雑然として生色なく、朝鮮人の服装は次第に良くなる反面、内地人のそれは逐日あはれを増し、強盗、傷害殺人、土地家屋等不動産の侵害さるゝもの頻出し、無警察状態に突入し始め」、[かゝる混迷状態下に於て、物価は次第に高騰し、今迄の建設主材料関係の未払金は盛んに請求され、商品其他の貸付金は集まらず、殖産銀行よりは最早や一銭の借入金も不能となり、日給工員は其の日の生活にも困るとて生活給を要求し来り、為に八月二十五日付をもって一応賃銀の支払をすませ、退職金を支給して、全工員を解雇し、状勢をみて改めて優良工員のみ復職せしむる事とし、退職金最高四百五十拾円、最低二十円、総額約壹万三千元を支給して整理]をしたという。

さらに、「八月下旬よりは状勢益々悪化し、群民は馬山府内各工場事業場に殺到し、製品、半製品、機械器具等椅子テーブルに至る迄持出さんとし、工場のガラン洞となるもの続出す、朝鮮丸金としては、早速内地人を中心に朝鮮工員中優秀なるものを選定して警戒につかしめ、更に隣の部隊と連絡これに依頼して銃ケンにて武装せる兵を立哨せしめ、専ら工場の安全化を計りしも」、[無為に形勢の觀望を続けるの不可不利を察知し、一挙工場売却運動に乗出し、府内李学喆を交渉相手として金壹百五十拾万円即ち当時の資本金額にて売渡し、殖銀よりの借入金一一五万円は其の仮買手の支払責任にせんとし、接衝これ努めたるも、鮮人間に於ても政情不安買取後の経営難予想、日本人財産は自然朝鮮人のものなり売買により取得の要なしとする鮮人間の当時の通念を裏切る事となる等を顧慮して、右顧左ベン容易に決定に至らざる

戦時期小豆島の丸金醤油株式会社の朝鮮進出について

内に、日本軍の全面撤退、米軍の進駐を見、米軍の意向打診の為、売却商談は一時中止のやむなき状態となれり」とする。

谷澤の「記録」によると、「九月四日早朝日本軍は全面的に馬山を撤退し」、「日本軍に代り、米軍進駐し来り、「ジャスパアステフェン中尉」馬山府インに任命され、米軍軍政下治安は一応確立さるる事となりしも、米軍の小数なりしと土地、民情等不案内の為、不安は猶去らず」とある。

そこで、谷澤は、「六日朝米軍をして朝鮮丸金を認識せしむべく、米軍新府インに挨拶旁々府庁に同中尉を訪ね、万般了解に努めしも、会社名簿中朝鮮丸金の製造品目に軍需品なる字あり、ジャスパアステフェン中尉は眉を動かし顔色只ならぬものありしかば、そは味噌及醤油の食料品をやむなく軍納し居りしものなりと説明し、疑惑解消、ウイスキー、カステラ等御馳走になり、猶懇談、今後の朝鮮丸金庇護を要請せし処、工具を善く誘導して生産を続べしと云ふ、了として一応帰」ってきた。翌日も再び訪問し、「種々情報を報告、了解に努めし結果、朝鮮丸金は現機構の仮従前通りのフル運営を続行し、未だ残留し居る日本人及朝鮮人民に対し味噌、醤油を提供すべし、又工具には賃金を支払ふべしとの指示を受け、帰社後此の旨警戒に任じ居る優良工具等にも話し傍ら山本取締役、小豆工場長とも打合せ、九月二十五日より作業再開とし、それ迄はやはり優良工具及社内合宿内地人社員をもつて会社の警戒に任ずる事」としている。

しかし、その後、「十月二日当社工場に於て、会社側の許諾も有らはこそ、朝鮮人民共和国支援のもとに馬山府内食糧品製造会社の工具大会を開催し、閉会后当社鮮人従業員は左の三要求を会社側に提出」した。それは、つぎのようなものであった。「A. 前回の退職金は総額壱万参千円といふ小額にして、会社休業中工具は生活に窮す、宜しく一人当り金式万円の生活補給金を支払ふべし、戦時中我々は奴隸的待遇賃銀にて酷使されたり、今や会社は此の報償金を支払ふべきなり、B. 朝鮮丸金醤油株式会社の運営権を我等朝鮮

工具に委任すべし、朝鮮の独立に依り、総ての日本人所有に係る工場財産等は敵産として取扱はるべきものなれば、新朝鮮政府の政策が確立する迄工場の管理権を最も関係深き我等工具に委譲すべし、C.我等は当社作業の中断に極力反対す、新朝鮮建設途上に於て工業復興こそは正に重大なり、亦現在の失業状態が続かは我等工具は生活の道を断たるべし」との3要求であった。

朝鮮丸金は、「ジャスパアステフェン府イン宛更に英文をもって状況を詳報し」、この3要求に関しては、「Aの要求額は在籍工具数約百名なれば総額二百万円なり、又退職金としては会社の規定を無視して先般金壹万參千円支払ひ済にて、将来何等の再要求を為さざる旨の一札を取り居れり、資本金一五〇万円、借入金一一五万円の株式会社が二〇〇万円を支払ふものとせば、会社は正に破産すべし、又かゝる大金は全然無し、如何にすべきや、我等は貴軍の意見に従はんと欲す、Bに対しては、味噌醤油の醸造は一見簡単なる様なれど実は仲々至難にして、経営醸造宜敷きを得て、利益を挙ぐるは、朝鮮人工員のみにては到底不可能なり、Cに対しては、我等も亦同感なり」との見解を通報した。

「米軍馬山府インジャスパアエヌステフェン」は、こうした事態に対して、「朝鮮丸金醤油株式会社の工場若くは其の経営は米軍の命令なく変更すべからず、同工場に対する如何なる個人又は団体的行動も米軍政官に於て嚴重に処罰さるべし」と指令しており、「十月二十三日付にて米軍政官命令を以って立入り禁止を宣せられ」、「当工場及其の財産は米軍の管轄下に置く、掠奪者は総て拘引さるべし」との制札を本門に掲げていた。

しかし、「退職金二百万円の支払要求益々烈しく、朝鮮丸金としては現金なき為、工場又は所有物件を売却せされは支払不能の旨返答し、或ひは米軍に対し、工具より該金の支払要求有るも、会社には入社以来満三ヶ年未滿の者に対しては退職金支払の義務なき事を話し」ていたが、「遂に止むなく工場買取り折衝中の李学喆氏と打合せ、要求額の十分の一たる二十万円の金策

戦時期小豆島の丸金醤油株式会社の朝鮮進出について

を頼み、会社の事情も充分話して、十月二十二日二十万円支払にて本件は解決」したかに見えたが、「十月二十七日米軍軍政部より内地人所有財産売買許可に関する公文発令され、李氏との商談も一応最初の原案通り金式百六十五万（但借入金一一五万円有る故、差引正味壱百五十万円）、将来貿易可能の時至らば製品の日本向輸出等も考慮する条件にて、売買の話纏り、書類を調べ契約書を作製調印せしも、先方に現金なく連日入金督促中の処、日本人個人及法人の所有物件売却中止命令の発令あり、長嘆息せしも施す術無し」と谷澤の「記録」にはある。

彼の「記録」にはまた、「十一月に入りては、工場の保安は米軍の立入り禁止指令に依り幾分安全となり居りし上、工場の運営も日本人の命に服さず事情已むなく不本意ながら李学喆を主とするメンバーに大体一任し、金庫のかぎ、帳簿等も渡し、工員の手により細々なから生産活動も開始され、我等は其の指導に任ずる状態なりしかば、今は順次残り居る男子社員の引揚を為すべき時期到来せりと山本、小豆、谷澤の三者打合せ、当時すでに閩船の出航は禁止され居りしも関係先へ秘かに特別依頼して、抽籤をもつて三班に分ち、総額約十萬円の金員を夫々分持せしめて、三回に別れ、十一月下旬をもつて目的通り極秘裡離鮮に成功」したとある。そして、「十二月に入り、鮮人の我等に対する態度は何故早く帰国せざるや、いつ迄未練らしく残り居るやの空気益々濃厚となり、米軍筋の今暫く否二、三年は残留して工場経営指導に任ずべしとの意向も無視さる、山姿水鏡のたたずまひは変らざれど、御神体を失ひし馬山神社境内に登り行けば、枯木肅然として敗戦の落人の感深く」したという。

このように事態が推移するなかで、谷澤の「記録」によれば、「十二月十八日米軍馬山府インに対し、米軍京城軍政府ホツヂ中將より公文指令到着し、日本人工場経営者は米軍の承認する朝鮮人管理人を選定し、同書指示通りの正式書類を英文と鮮語にて作製提出し其の認許完結をまち日本に帰国すべし

との指令に接す、四囲の状況留鮮到底不能とはしりなから三年有半骨身を削りて略々完成せしめ業績挙りつつありし此の工場を敗戦の為とは云へ、米軍命令とは云へ粗雑なる鮮人のみに管理を委任して離鮮せんは全く心外なりしも、山本取締役、小豆工場長共々打合せ、今や命令通り実行するの外なしと在来の行懸上李学喆氏に管理を委任する事に決し、一先づ日本語にて相当広汎なる指示通りの書類を調べ、李学喆氏に鮮語に翻訳を依頼し、谷澤は英文に翻訳し二十一日夜遅くこれを完成、二十二日早朝米軍府インに提出 OK として受納さる、嗚呼遂に朝鮮丸金醬油株式会社は此の日を以つて其の管理権は正式に李学喆氏に委譲されたり、げにすまじきものは敗戦なり、八月十六日より百二十九日間の苦闘も米軍武力と鮮人の忘恩の前には如何共致し難く悉く水泡に帰したり、されど工場は死守の甲斐有りて馬山唯一の無疵工場として猶現存す、今や為すべき責務は身命をとして努力に努力を重ねたり、最善を尽して天命をまちたり、今又何をか云はんやの心境なり」と記している。

こうして、「日本人従業員の内地引揚は完了せしめたり、無疵工場の管理委任手続も完結せり、此の上の残留は益々鮮人の蔑視を招き、米軍命令に反する事となり、如何なる不祥事の偶発を見るやもしれず、移築十三軒の蔵元及佐伯社長、前木下社長殿等には全く申訳無きも帰国して御しかりを受けなば潔く自決せん」と覚悟を決め、谷澤、山本、小豆の3人は、「二十二日夜秘かに旧馬山駅鮮人助役に依頼して、釜山行切符三枚を入手」し、「二十三日午前四時五十分馬山駅出発と決定」して、「二十三日午前二時起床、弁当など男手にて調べ、四時頃正門前に出で聲もさげよと朝鮮丸金万歳を三唱、秘かに見送りくれし二、三の工員共と淋しき訣別の辞を交しつ、徒歩馬山駅に赴き、列車の人となり、釜山安着」の上、「釜山にての船待をさげんと、京城より最終引揚の日本軍報導機関軍人一行の列中に特別加入を乞ひ、雑用、乗船手続も終り、臨時関釜連絡船雲仙丸(2,700吨)にて二十五日朝博多着、同日午後引揚列車の人となり、二十六日小豆島に帰着す、嗚呼遂に帰国せり」

戦時期小豆島の丸金醤油株式会社の朝鮮進出について

と谷澤の「記録」にはある。

そして、また「記録」によると、「帰国後、親会社に落付き、佐伯社長、清水常務其他の重役にも終戦後の朝鮮丸金処置の概要を報告し、工場死守、全員無事故引揚に就ては了とされしも、敗戦の結果とは云へ莫大なる価値ある朝鮮丸金の管理委任帰国に就ては誠に遺憾」としつつも、「親会社は健在、朝鮮組受入れにも支障なく」、「親会社へ復帰の方よからんと結論に到達し、持参し帰りたる現金にて十二月迄の未払俸給賞与等を手交し、退職希望者の外は親会社に復帰する事」になったとする。

おわりに

以上の検討を要約しておくことにしよう。

銚子のヤマサ醤油が満洲の新京に満洲ヤマサ醤油株式会社を設立した1940（昭和15）年に、小豆島の丸金醤油株式会社も満洲遼陽に満洲醤油株式会社を設立した。同社は、麹室内に使用する器具の一部を小豆島の本社に依存したが、他の設備は新調することとし、工場建設に着手したものの、工事は遅々として進まず、温醸設備や仕込み作業にも欠陥や不備がかさなり、成果をみることはなかった。

こうして、丸金醤油は、1942（昭和17）年4月南鮮の馬山に朝鮮丸金醤油株式会社を設立した。小豆島の醸造業者15工場を買収統合して、それらの工場の建物、機械器具等に移駐して、同社の工場建設が行われ、主な経営陣は丸金醤油の関係者からなっていた。翌年12月15日には初出荷をみており、繰越損金の償却も進みつつあったが、結局損金を計上したまま敗戦を迎えていた。

敗戦後の朝鮮丸金では、「全員一致協力情勢に即応して万般善処せんも、最悪の場合は無一物引揚も亦やむなしと相談一決」し、その後、臨時休業に入り、8月25日付で賃金の支払いと退職金の支給をすませ、工員の整理、解

雇をした。また、李学喆を交渉相手として工場の売却を検討するも、9月4日の日本軍の撤退と米軍の馬山への進駐のなかで頓挫した。朝鮮丸金は米軍との折衝につとめたが、生活補給金の支払いと朝鮮丸金醤油株式会社の運営権、管理権をめぐる朝鮮工員の厳しい要求に直面し、「不本意ながら李学喆を主とするメンバーに大体一任し、金庫のかぎ、帳簿等も渡し、工員の手により細々なから生産活動も開始され、我等は其の指導に任ずる状態」になったという。こうした状況のなかで、「残り居る男子社員の引揚を為すべき時期」と判断し、「十一月下旬をもって目的通り極秘裡離鮮に成功」したとする。そして、12月18日に、日本人工場経営者は米軍の承認する朝鮮人管理人を選定し、その認許をまって、日本に帰国すべしとの米軍の指令があった。そこで、これまでの経緯から李学喆に管理を委任することとし、必要な書類を作成し、米軍に12月22日提出し受納された。こうして、「無疵工場の管理委任手続きも完結」し、また「日本人従業員の内地引揚」が完了したのである。